

建設省土木研究所の竹林征三さん

地域の個性に光り

ユニークな着眼で評価

「風土工学」で初の博士号

九五年十月の第六回世界湖沼会議でも活躍した建設省土木研究所の竹林征三・地質官(当時、環境部長)が、ダムや橋づくりといった従来の「土木工学」とは異なる「風土工学」に挑戦し、「地域の個性づくりに貢献する土木工学を」と東奔西走している。ユニークな挑戦が実り、昨年暮れには母校の京都大学で、日本では初めて「風土工学の理論体系の構築により工学博士の学位を取得した。」これまでの土木施設は安全性や利便性の向上に役立ってきたが、今後は、それだけでなく、地域の誇りとなる土木施設づくりが求められている。従来の最適化原理でなく、個性化原理に基づくテクノロジーが必要という着眼が評価された。湖沼会議の舞台となった履ヶ浦周辺で、「風土工学」理論を実証するプロジェクトも期待されている。

竹林さんは一九四三年生まれ。京都大学工学部大学院を修了後、建設省入り。琵琶湖、甲府の両工事事務所長、河川局建設専門官などを経て、世界湖沼会議の開催時には土木研究所環境部長。第二分科会(淡水資源の確保と管理)の座長を務めた。「実務者のための建設環境技術」などの編著のほか、ダムのはなし「湖水の文化史シリーズ」(全五巻)などの著書も多い。湖沼会議後、竹林さんが精力的に取り組んでいたのが「風土工学」という新し

い学問分野の開拓。これまでの道路、ダム建設などの土木事業では、交通の利便性や治水・利水機能が重視され、環境保全や地域文化とのかわりが見失われがちだった。環境対策については、建設省による「環境政策大綱」(九四年一月)などで、環境との共生をめざす土木事業が正式に行政課題となり、これまでの物理・化学的指標に緑や生物の指標を加え、環境アセスメント(事前評価)や各種のミティゲーション(環境影響の軽減策)が採

用されるようになった。しかし、文化面での対応は半つかずだった。そこで、竹林さんは新たな課題として、「歴史・文化」地域の誇り「デザインテイテイ」の指標を取り込んだ「良好な風土形成をめざす土木事業」のテクノロジーを設定し、「風土工学」と名付けた。



国内では初めて、「風土工学」の構築で博士号を取得した建設省土木研究所の竹林征三さん

和正哲郎の「風土」論をはじめ、長町三生氏(広島大学)の「感性工学」、川野田二郎氏(元・筑波大学)の「KJ法」など、「土木工学」とは無縁だった学問分野の知見を駆使しながら、良好な風土形成に役立つ土木施設の方法論を探った。そのうえで、堰づくりの際の「かたち」や「色彩デザイン」、ダムの「命名」などを具体的に検証した。

論文執筆の合間をぬって、東京、つくばのほか、札幌市や北九州市、奈良県川上村などで「風土工学」からみた地域振興や暮らし直しなどをテーマに講演し、行政担当者や技術者、一般住民に刺激を与えた。

昨年十二月には土浦市内で、建設省履ヶ浦工事事務

所、同導水工事事務所、水資源開発公団履ヶ浦総合管理所の職員を対象にした合同研修会で熱弁をふるい、反響を呼んだ。博士号を授与された竹林さんは、「景観設計と言われているが、現在はまた見た目がいいというレベルに止まっている。今後は、地域の風土・文化に根ざし、いかに個性化を図るかが大切。ダムや橋などの土木施設が、そこに住む人々にとって誇りになり、地域以外の人々には、その地域の個性、文化として印象づけられる。そうした土木構築物のあり方をさらに追求したい」と語っている。

建設省の環境政策大綱では「環境の内部目的化」が盛り込まれたが、「風土・文化」についても、「環境」と同様、政策課題としての位置づけが求められている。そうした中で、竹林さんの「風土工学」は、ハード・ソフト両面からの理論の深化とともに、履ヶ浦など現場での実証が期待されている。